

メディアとしての空間(3)

「女性空間について」

デザイン学科・スペースデザインコース

定 松 修 三

A Study on Space as Media (…the Feminine Space)

By Shuzo SADAMATSU

目次

- はじめに
- 制度としての女空間
- 家族空間原理の推移
- 通念的女性役割からの解放
- 母(女)性的資質が支える住まい空間
- 母性が求める空間の質
- 空間を彩る女性的性情
- 空間記号としての女性的性情
- 結びとして
- 参考文献

はじめに

日本の「住居」に対する観念は、いえ(いへ)とすみか、という語に帰すると言う。

「いへ」の「へ」は隔(へだて)で(『一語の辞典〈家〉』板倉篤義)「すみか」の「すむ」は鳥などが棲む、「か」は処(ところ)で、もちろん巢(す)のことである(『日本語百科事典』金田一春彦・他、など)。つまり住居は外と内を隔てた囲い空間を築いて巣づくりする、その場所を意味している。

囲った空間を設け、巣作りをし、生活を維持する集団、即ち、家族の単位は、それぞれ種の維持、財の継承、及び、その繁栄・拡大を図る。

その家族形成の因であり、核となる巣づくりの主、即ち、子を産み、身を挺して育てる女性こそ

家族の主体でなければならぬ。それを素直に制度化したのが母系家族制度社会であろう。今は、それもわずかの民族の間にしか見ることはできない。

生物の社会の多くは雌が巣づくりを担う。雌が子を育てる自然の摂理が堅く支配しているからである。人間も自然の一員としての本質は変わらない。昔から賢者の知恵として、住居は女性の考えで築く方がいいと伝えてきた。

そうした観点の、「巣作り」を原点とした住まい空間の形成原理は、即ち、女性の空間形成原理、或いは母性の空間形成原理と言うべきものである。

しかし、もう2000年以上も遡る頃から、多くの人間社会は男性中心の、力支配の社会に変質してきた。そのため、個々の生活空間では本来の、女性を中心とする形成原理の価値は相対的に弱まってしまった。とは言え、父系制社会、家父長制の強固な社会でも、巣づくりの意味が失われるのではなく、女性が家族の生活を維持する役割も小さくなった訳ではない。つまり、家族空間の原理は住居の奥の身内のみの閉ざした空間で守られてきたのである。それらは韓国内房(アンパン)、小房(チャンゲンパン)などに代表されるように、またそれほど明確に置かれていなくても、大なり小なり奥まり隠れたところで息を継いできた。

即ち、家族の私性を守る家族空間(女性空間)は「奥の空間」と考えられるようになった。

奥に隠れたとはいえ、それらは巣として、母性を生かすために、最低限の条件は整えた空間

であった。

つまり、本来は住居の核として君臨すべき母性空間原理が少々抑え込まれ、後ろに引き、代って男性が表に立ち、守護することを建前に、女子供を後方に隠して見えないようにする構えに変えてきたのである。そのような家族空間のかたちは、必ずしもいいあり方とは言えないものの、維持の易しさもあって、長らくその形態を保ってきた。

だが、今世紀後半になると、家族空間は因習からやや解かれ、表に現れてくる。それは後進性を抱える国々の傾向でもある。特に、日本の場合には、家族制度の価値観の変動もあり、更に様子を一変させる状態に突入していきつつある。それは家族意識が大きくゆらいで、家族のかたちが根本的に変わろうとしているからである。つまり、多くの女性は男性中心社会で形成された通念を排して外社会へ進出するようになる。それは個人の権利意識が著しく拡張した結果でもあったが、それにつれて、社会も家族も質的变化が様々に進化した。生活空間も当然変化を免れ得なかった。周知のことだが、家父長のシンボルであった玄関、応接間、座敷に床の間など、家長の表の役割の場が漸次意味を失い、代わって、独立した個室、広い居間などが拡充されるようになった。それはいわゆる民主化の方向に歩むものであったが、本来の巣作り原理に則る家族空間を住居の核とみる思考からは微妙にずれる。どちらかと言えば、住居は家族集団を維持するために必要な空間から逆に遠ざかる傾向にあり、家族の求心力は弱まり、個人の私生活維持を重視するばかりの住まいが多くなった。現在は、住居の主要趣意が放棄されたり、変質したり、問題が逸れた方向に向かいつつあるのである。

私達は今また、巣作りの原点、母性的空間原理の意味と価値に目を向けてみる必要がある。

一方、その個人の私生活を優先した今日的風潮によって、社会には未だ巣を築くに至っていない住まい空間が溢れかえる状態になった。それらの空間を構えた人々は、巣づくりの可能性を前に、男女相互にそれぞれのジェンダーの表象に関心を

寄せ合う状態にある。当然ながらそれら個々の空間は個性とジェンダーの表象を満たし、相互の心を引き、いずれは巣づくりに至り、住まい空間を完成させることが予定されるものであろう。即ち、独り住まいの空間の多くは、家族空間となる前の、いわば前家族空間として存在し、巣作りの予備的活動を潜在させている。ではそこには家族空間の原理も潜在しているのであろうか。恐らく、それらにとっての家族空間の原理は、その時点の独り住まい空間（前家族空間）で独習する機会があるにせよ、元々、身に付けているものは、それぞれが育った家族空間で得たもの以外にない筈である。独り住まい空間を持つ以前の、自らが育った家族空間はいつまでもそれぞれの私家版テキストとして存在する。そのページは、自分のための母（女）性空間の確かな原理で埋められている。恐らく、大多数の女性は自分が育った家族空間の母性空間原理をなぞり、継承していることであろう。その結果、自らの空間もまた原理に即するものになる。生活するということは、母性空間を学び理解すること以外の何ものでもない。人々は生活を維持するために住まい空間の本質を理解しなければならない。女性空間の多くは前家族空間のままであれ、その本質を自然に継承しているのである。女性は本質的に「生活者」なのである。その意味で、独り住まいの空間、即ち、前家族空間における女性というジェンダーの表象は、家族空間に近似的な、予備群としての意味を持っている。

また、私生活の自由化は空間を衣装のように、或いはまた舞台のように、記号を豊かに載せ、商業的風潮にも臆せず乗ってしまう。ジェンダーの表象記号も空間というメディアに、盛りだくさん詰め込まれるようになった。

以下、家族空間、及び、前家族空間の女性空間に焦点を合わせながら、女性的空間表象を探り、住まい空間を考察する。

制度としての女空間

先ず、原初的な意味をたずねて、世界の数少ない母系制度社会の例から、今日、貴重な扱いを受

けているインドネシア西部スマトラのミナンカバウ母系制社会をみてみよう。もともと男性が女性の部屋を訪れる訪婚が主であったが、現在は入婿式が多いという。家族の中の女性が土地や家屋財産を相続共有するが、家屋の全てが女性の空間という訳ではない。娘が生長すると一部屋を受け継ぎ、そこに婿を受け入れる。そうした部屋が女空間である。他の、広間などは家族全員の空間であり、客のための空間でもある。個々の部屋のみがそれぞれ女性の構える一世帯の空間になる。男子は部屋を相続しないが、身柄はいつまでも生家に置かれる。男子は結婚した相方の相続する女空間に入ることができるが、生活の基盤は生家の方があるので、男親としての権限や支配権はほとんどない。しかし一方、これらの女空間は制度上の役割空間であるから、視覚的表象をもって知らせる必要はない。むしろ、婿入りした男性が（共棲しても）自己を表象する空間でもない。その男性が何らかの社会的、政治的立場の表象を必要とするときは、彼は基本的には自分の生家の方の共有空間（広間など）にそれを施す。

この制度としての女性空間では「女性の」という特別な表象は意味を持たないものの、相方を受け入れ、子を産み育てる巣となる以前は、一人の女性の部屋であり、個の表現メディアである。姉妹が部屋を並べる状態からいって、個性差の表現、それに付随してジェンダーの表象された空間であることは言うまでもない。

次いで、台湾原住民のアミ族の場合、今は男系社会になっているが、かつては母系制社会であった。ここでは一家屋の中で男女がそれぞれ空間を使い分ける。古い家屋では間仕切りのないまま、東側半分の空間を表側として、女の座る場所（女の領分「女界」）と定め、女性が日常的に使う。また、後の半分の西側空間は裏側とし、男が座る場所「男界」で、日常的に男性が使う領分である。女界である東側空間では北が上位で、年長から順に座が定まる。西側空間の男界では南が上位で、東を頭に寝る。女界では寝るときは上下座の順が逆に、つまり、男界に揃えた形で南から長年の順

に寝る。これはケガレのない未婚女性を神に近い場所におくためである。頭は西に、つまり男界の方に向けて寝る。結婚したペアができると、幾年か女界の南部分（神の座から遠くのいわゆる下座位）が寝場所となるが、何人か子供ができた後はまた男界と女界に分かれて寝る。敷地家屋全体からも東側は表である。それは神聖な場所、重要視される場所で、常に清潔に綺麗にしておかなければならない。炊事場、便所、家畜小屋、ゴミ置きなどは西側の、いわゆる裏に設置するのが普通である。つまり、女・幼児らは大切な場所、不潔を避けられる空間を占有する。このことの意味は大きい。複数の部屋で構成されるようになった現在の家屋においても、東側にある部屋は神聖な表の空間で、やはり女性が使う。西側の部屋は当然男性の空間で、南・上座、北・下座のしきたりも全く変わらない。

ここでは日常のあらゆる物象が女・表、男・裏の対照を鮮明にして成り立っている。

ところで、このように男の部屋、女の部屋、或いは男の家、女の家と空間を男女隔離する社会の例は世界中に沢山ある。これについては、隔離の原理が個体の性的衝動を強め、つがいを形成するのに有利に働いているという意味に説かれることも多いが、それより納得のいく意味は、生活守護の神の清浄を借りて、種族維持の原体である女性の生活を守ることである。

社会制度的、或いは伝統的習俗として、男女空間を区分するその必要は、あくまでも女性側にある。住まい空間の生活の営みは子を産み育てることに大きな比重がかけられる。成人した男性には庇護空間は要らない。

これらの制度や習俗は、もちろん、集団の形成、或いは家族の形と一体のものである。

古代では、いま俗に未開社会と言われる少数の部族に近似的な、出生血縁の稀薄な大家族集団が多かったと想像されている。同じ宗教、同じ規範に立ち、同じ食物を食して、同じ考えを持ち、同じ行動を取るなどの、小社会を形成しているのである。男女はそれぞれ別の家屋に住み、婚姻ペア

ができてそれらは大家族の中の個と個の結びつきでしかない。子等にとっては母親は母だが、父はさほどの意味を持たない。それは恐らく母系制の原初的な意味を持つものであったろう。

制度的なそれら女性空間は、女性空間というより母性空間というべきであるが、子を生み育てることへの安全性、適性環境保持への強い思いに則った空間である。それは小動物の、例えば鳥の巣における子育ての、母鳥が外敵に対し、あれ程戦々恐々と、その神経を使うさまを見れば当然の願いと言えるだろう。その空間は一族集団の総力を結集して守られるべきものなのである。多様な民族の習俗の中に、家族に子が生まれれば戸口に何らかの印を掲げる事例が多くある。それは単に祝事を意味するだけでなく、その空間に気を遣い、庇護を求めるものでもある。また、日常の家事、行事がとりわけ女空間に関わって多いのは、育児に伴う作業が引きも切らずあるからであって、制度的、役割的な女性空間は、実は、住まいそのものでなければならないのである。

家族空間原理の推移

父系社会へと移行した歴史過程は、財の形成や保管、また後継者育成など、「家」の概念を形成する根幹の仕事が、家長という男性の主導権下に置かれる態勢になって、住まい空間の根幹である女性空間原理をあまり省みない状態になっていったということである。

そうして「家族が生活を営む空間」という住まいのありかたが歪んだ形になっていった。

今日でこそ、住居は家族空間であり家族の私性を守る空間と考えるのが当たり前だが、住まいの歴史はそうではなかった。住居が基本的に家族中心のものと一般に意識されるに至るのは近・現代になってであり、住まいの空間原理もそこでやっと意識されるようになってきたに過ぎない。

イーファー・トゥアンの『個人空間の誕生』によれば、十七世紀以前のヨーロッパなどの住のありようは、「混雑や外の世界への解放性は、大邸宅に普通の特徴」で、かなり長い間、住居には家族

ばかりか、従者、牧師、事務員、召使い、小売商人、徒弟、などが雑居し、しかも、ひっきりなしに客が訪れていたので、私的な空間はとても望めなかった（4章：家屋と家庭）と言う。今日では寝室といえば私的空間そのものだが、これさえも、必ずしも個人的な空間という訳にはいかなかったらしい。のち、天蓋付きのベッドが出てくると、カーテンを引いたその内部のみ僅かのプライバシー空間になったと記している（同）

生来の住まいの起因が、家族空間の原理そのものであることは当然で、確かめるまでもない。しかしまた、住居のありかたが、長い間歪んだ形を取ってきたことも認めざるを得ない。しかも人口が増大し、社会が複雑になり、住まい空間を遣り繰りで凌いできたのだが、男性が中心の社会でのやりくりであるから、私性の意味の強い空間、そうでなければ困る空間さえも、あえて、意識的に公的空間と区別しないうできた。つまり、外向きが大事な男性の生き方は、私情にかまけるを恥とする感覚をつくり、家族だけが休まる空間を副次的に扱い、社会に影響のある外の者たちの同居を当然視してきたのであった。

日本においても19世紀の初め頃まで、家族生活のためだけに住居を建てるなどということはなかったのではないか。男性は家長の分別として、家屋を建て公にも空間を供することは、公人（男）としての立場（権勢）を築く意味が大きいことを重視していたのである。

その封建・全体主義社会が崩れたとき、市民が多少なり自由になって、やっと家族中心の住まいが迎え入れられるようになる。今は当然、われわれの住まいの形象、或いは生活空間は家族主義の原理に復帰している筈である。しかし、一方では、その家族主義が自ら崩壊していくような現象もあるようだ。だが、考えて見れば、空間の実質がないような、つまり、母性空間原理に沿わない住まい空間はそれ自体成り立つ筈もない。女性（母）が家族の芯にいて、家族の絆を保ち、子を育む、いわば家族形成の第一義の目的に沿ってのみ、住まい空間は出立する。時により母性空間原理は見

かけは危うく見えたが、実のところ住まい空間を成り立たせる核であることは一貫して変わりはなかったのである。

通念的女性の役割からの解放

しかしここで、今日の問題をもう少し追うことにする。そこにまた少しばかり危機的状況が見えるからである。と言うのも今やかなりの人々が自分たちの未来には母性空間原理が意味を為さなくなるのではないかと疑い始めているらしいのである。まず、肝心の女性自体が自らの役割を重視することを好まなくなった。女性が家族空間を維持するために、その役割作業に縛られる一方なのは、女性にも等しく与えられるべき個人的権利を抑圧する封建的習俗でしかない、強く反撥心を持つようになってしまったと思える。

もはや、これらの問題意識は決してフェミニズムの論の中にだけあるものではない。例えば、ローカルな調査（福岡）ながら、結婚を望まない女性が1986年1.5%、1993年1.7%と少しずつ増え、結婚しても問題があれば離婚すべきと考える女性は1986年50.9%、1993年62.3%と大きな数を示し、また、結婚しても子どもをあまり持ちたくない、持とうとは思わない、併せて8.5%というような数値があがる（福岡市市民局「福岡市女性問題基本調査」1994）。これらの数値は女性にとっての社会的慣習、或いは制度が適性環境になるまで上がり続けることが予想されている。

小論に対しても今日のこのような時代を背景としながら、現代の家族空間に、巣づくりを原点とする母性空間の原理を強調し、それを押し付けようとするのは、そのこと自体思考の貧しさを表していると考えられる人もいるだろう。しかし、巣作りと母性空間原理は、必然的に人間の生存の原則と重なっていて、それらが薄らぎ、弱まっていきつつあるのは、今われわれのこの社会に計り知れない損失を与えつつあると考えることもできる。

もちろん、女性が反発するに至った問題が、過去長期にわたって潜在してきたものであったことは否定できない。そのあるものは社会の因習であ

る。それは外からの眼で曝し出されないと理解の及ばないものだ。ジェンダーの領域や、役割は、それぞれの土地、国、社会に生成された異なる様相の、その社会の「女らしい、男らしい」という感覚分別に堅く支配されている。

「(その感覚分別は) 男性もしくは女性にとって何がふさわしいか、という既成の観念への適合—いいかえれば、男らしさと女らしさについての考え方—を通じていちばんよく説明される。そして、この男らしさ・女らしさというのは、生物学的な違いではなく、社会の習慣にかかわっているのである。『欲望のオブジェ』アドリアン・フォーティ」とあるように、ジェンダーの感覚分別は、人々が好み選択した方向に沿う。もちろん、一国の社会習慣は政治体制や人々の観念に支配されるから、その選択の方向も、当然、時代の流れ・体制の変化と共に少しずつ変動してきた。ところが、現代のように情報が地球上を、国、社会を越えて行き交うようになると、個別の社会の事情も「慣習の違い」も明らかにされ、人々の意識には様々な軋轢が生ぜざるを得ない。かくして、フェミニズムの問題には今後も、その社会の因習的な不都合部分がいつまでも長く関与し続けていくだろう。なぜなら、いくら情報がかけめぐっても世界中の因習的不都合は、そう簡単に解決には向かわない、暗い慣習と見えるもの程歴史的、地理的遷移の絆に強く結ばれ、異相であってもそれなりに民族的彩を保ち続けるものであるからだ。

日本の社会は、かつて、中国儒教的秩序の流れに沿った習俗から西欧の近代文明の影響を受けた習俗へと変わり抜けたが、ジェンダーの感覚分別にはさほどの変貌はない。当時からの日本の男女の感覚分別とは、男性の特性は体力的強靱さ、激しい活動、冒険心、恐れ知らず、決断力と自制心など、一方、女性の特性は繊細な身体、弱さ、情緒的気質、おとなしさ・優しさ、協調・従順な姿勢などの定見に沿うものであった。つまり、男性支配社会に共通する、それら定見を大方の者が好ましいもの、或いは妥当なものに見なしたのである。当然、それらの社会的定見は個体を強く縛り、

二つのジェンダーはそれぞれの定見に沿う社会的な役割を意識的に自己化して共生しようとする。またそれらの定見が社会的にいかにか有効か、また正当かは多くの観念論が補佐し、社会全体がこぞってそれら資質の差を明視化することに努めた。人々もそれら視覚化された性差の一般的社会通念を進んで学習し、享受し、継承してきた。

そうした一連の枠の中に閉じ込める定見、もしくは、社会通念は、必然的にステレオタイプなものに陥る。従って、その実質的な被害も観念上の被害意識も併せて、或時点で解放されなければならないものであった。フェミニズムは閉じこめられた人々の、自分自身の中にある不自由、固定的観念を解こうというものだろう。

小論はこういった社会通念的なものも含め女性の性情の役割の意味を乗せた空間を対象にしたいのだが、これまでの経緯を考え、まず根元的な意味を持つ母性資質を手始めに、その空間の意味を考えることにしたい。何故なら、母性は女性というジェンダーの属性の主要部だが、それは一方のジェンダーである男性に侵犯されるものではないからである。

母（女）性的資質が支える住まい空間

現代社会では育児が生活の全てとはいなくなかった。もっとも、中世には、既に、様々な社会構造を背景に、生活要素はきりもなく複雑さを増し、とりわけ階層的な差異と職能的な差異が甚だしい生活の違いを生み、その経済的な差異が生活要素の軽重を変え、生活空間は直ぐに押し量れるような画一性を失った。女性も家事に従事する意外に、多くの社会的な仕事に巻き込まれた。家父長制の社会においては、住まいは女性には不都合な空間構成が多く、家の長たる男性は社会的空間を自らの家屋内にしつらえ、自らの社会的立場を誇示し、また、構える空間を家の顔とするだけでなく、社会の鏡に映る自己を内の家族に示し、家父長の権威を振り回して家を治めた。

実を言えば、空間を整える能力は本質的に女性の方が長けている。制度上、或いは役割上、女性

は黒子に徹することになる。男を補佐し、男のための空間を手助けし整える。家の全ての空間をコーディネートする役割は女性にとって家を守る重要な家事と認識されるようになった。

有能な黒子となり得た女性の場合、男性を家長という形式的な置物に仕立て、操り、実質、女性支配の家族と化すこともあった。しかし、一般的には、炊事洗濯は生得的に与えられた女性の仕事と刷り込まれ、日常の雑事は全部女性にさせ、代わりに、家内の細かいことに一切口出さない男がよしとされるなど、形式的男性優位の既成観念に縛られた家族が多かった。今もそのような類型の生活を保つ家族が結構存在し続けている。ときに「自立できない男たち」と言われる一部の男性がマスコミに浮上するが、彼らは社会的な表立つ行動を全て遺漏なく遂行する職業的能力だけは十分に身に付けても、家庭内の必要作業は何であれ舞台裏の些事として手を付けない。そればかりか衣・食・住に関わる生きるための基本活動は全て裏作業として、大方の能力を退化させた人たちである。

わが国ではかつて男尊女卑の、儒教的な観念から、女性はすべからず補佐役に回るべし、といった教導に縛られたこともあったが、そもそも女性はそれら家事作業を厭わず、男性は疎むという、性情の違いも抜き難くあったとも思われる。それはもちろん女性が母性を包含するからであり、巢を維持し、子を育てることにつながる作業を快とする資質を生得的に刷り込まれている故もあろう。要するに、女性が黒子の役を負ってしまうのも、それを好む本質的な資質を持つからだと考えることもできる。

実際には母性の要する空間は、男性中心の必要空間と見られるものに相対的に軽んじられ、縮小されてきたかのごとく見えるが、雑多な社会的仕事の空間にも、煩雑な家事作業の空間にも、女性は駆り出される代わり、そこに実質の必要空間をそれなりに確保した。もちろん、それらは適正にして十分な空間と言えるものではない。母性の必要とする空間はあくまでも家の母体であり、安全

で清潔な、生命を守り慈しむ空間が実現されなければ、母性空間原理の本質に沿うものではないのである。

この安全と清潔を維持する務めは、もちろん、女性が内々の空間に限られることなく、自らや子供に影響がある限り、家の内外周囲、また町全域にまでも広げられた。男性は安全を確保する役割、即ち、家長として、家の楯となり、フィジカルな主役たらんことを自認するが、今となってはもはや空間の安全は、力の誇示、物理的強固さで獲得するものではなくなった。日常的には生理的、精神的な安全空間が遙かに重要とされる。男性の多くは外向きの社会的立場は重視するものの、家の周り、地域の環境整備などに気を使うことは少ない。女性が育児だけにしばられる時代ではないとしても、安全で清潔な環境はそもそも女(母)性的資質でなければ築き難いと承知されるのである。

家族は誰でも巣の中でストレスを避け、心地よく、家族同士が心通わせ、寄り添って暮らせることを願っている。その全ては巣を作る女(母)性の力、その資質に頼む以外にない。

母(女)性が求める空間の質

では、母(女)性はどのような空間の質を求め、実現させようとするのであろうか。

一体に女性が求める空間の質の多くは感覚的判断に基づくものだ。女性は身体的にと言うか、より根元的な生存のための環境に対応して生きるからである。それに対し、現代の科学進歩社会は女性の多くを空間に関する「知に弱く理に疎い」人に追いやった。もともと女性空間原理に基づく感覚判断は、家族という小集団の調和的な守護空間を築くために役立っていたのだが、近・現代は科学によって生活に障害をもたらすものを限りなく探求し、それらの排除に要する知識を限りなく必要とさせる生活を目標としはじめたため、生活の知恵はすっかり消沈してしまった。しかも、生活の向上のためと、合理思考の追求に引きずられ、ともかく、感覚判断では追いつけない身辺環境の守護空間に生活を委ねなければならなくなったの

だった。

現代には、住まいにはもはや母(女)性的性情のもたらず感覚で制御可能な生活空間は亡くなった。もともとの家族空間の質は、ごく大まかに言えば、生身の体の反応にゆだねた直なやりとりのできるものだけが取り上げられた。そうした、空間の質をここで上げながら、その意味を考えておきたい。

1) 安全+安定

空間の安全を希求するうちの、根元的なものは家屋の強度、その他諸々の性能に関する事項である。男社会の中では、ともすれば女性の手には負えない問題だという偏見が支配的である。女性は家屋の内部の機構、性能を判ずる知識に弱いというのである。確かに、家屋という大きな器の性能の判断には、感覚に頼る部分は少ないのかもしれない。しかし、家屋がいかに大きく複雑であれ、管理のための知識や技術を修得することが女性の資質に相応しくないものであろう筈がない。またそれ以外に、女性は女(母)性的性情故に、生活の隅々の安全を求め、働きかける。『フランス女性の24時間(草思社)』をみると、そこにはフランスの女性の日常の家事を細々と収録しているが、例えば台所のゴミについてのマリーの弁を少しばかり収録すると、「野菜クズみたいな生ゴミは全部洗面器に入れておいて、庭の堆肥にするのよ。…卵の殻も入れるけれど、店で買った卵はどこで何が入っているかわからないから、堆肥用にはしません。野菜クズもわが家の畑でとれた野菜と、買ってきたものをきびしく選別してるのよ。…」(バラなどの)木をはびこらせておくと、破傷風の危険があるものね。病虫の温床になるし。…」など、いろいろに気遣うことを話している。少しの矛盾等には臆することなく、気を遣い、独善的判断をし、行動する。つまり、家庭の女性は常々安全を求める細かい神経を持っていることが分かる。科学的な合理性に基づかなければならぬものであれ、日常は極めて感覚的に処置していく。

一体に女性は、些細な危険を察知しては、細や

かに防御し、決して大上段に振りかぶらず、ごく日常的に安全な環境を形成していくのである。安全と安定は、危機・災害を予想することができる人間が明日へと生き抜くために渴望する環境条件である。母性を抱え持つ女性こそ、家族に迫りくる危機を予感し、また異常への目配りを怠らない。

家族の安全願望は主として身体的、生理的欲求に基づき、また、安定願望は精神的な多様な欲求に根ざす。母親は家族の様々な願望に応じて、家族の適正環境を何とか得ようと常に努力する。つまり、安全な環境を形成し、その安定した環境を維持しようと努める。たとえ男性が家屋等の物理的な安全性を実質的に支配しているとしても、日常の気配りはほとんど女性に依存する。女性の感覚的察知、身体的判断の方がはるかに安全を支配しているのである。

2) 清潔+快適

適温適湿によって確保される空間の清潔と快適は日照、換気、清掃など物理的な対処と即応しているが、それらはもちろん見る、触る、嗅ぐ、など感覚で察知し得る自己基準の判断に対応している。女性的性情は本来、若い女性の清楚な容姿に表れている感覚に近い潔癖性が基にあると思われ、清潔に対応する気質は本性的なものと考えられる。しかし、感覚的な対応は、それぞれが育った環境の違いから、また身体的判断は個体の差違から、恐らく一様ではない。が、ともかく根幹にあるのは母親になる者の出産・育児に繋がる神経の作用であることは間違いない。

現代社会では、清潔の維持には多くの知識が必要と考える人が多い。生活の近代化に伴って家政学が広い科学分野と関わりを持ち、女性が生得的に身に備える清潔感覚を信頼しなくなった。世代ごとに伝えられていた生活の知恵や判断能力も絶えてしまっている。そればかりか、感覚はより強い刺激に慣れて麻痺し、全ての人は自己判断に確信を持っていないようになってきている。それは危機的な状況なのである。

生活において感覚を鋭敏に研ぎ澄ます必要のあ

るときは、当然、変事に対応する必要知識の修得欲も高まる筈である。知識を得るためにも、鋭敏な身体感覚が放棄されてはならないのである。

全ての人々はそれぞれの五感受容で快適な空間媒体の情報を形成することができる。冷たさ、固さ、柔らかさ、暖かさ、静けさ、賑やか、快き音、無臭、芳香、美味、自然感、視覚的自然状態、等々、これらに鈍感では、特に、母親の役割は全うできないだろう。子供や弱者に悪い環境を極力排除しようとする潔癖さをもって、母親は家族の適正環境を希求し、空間を守る働きを身につけるのである。

女性の感覚について余録すれば、博報堂生活総合研究所が1992年におこなった調査をまとめた『「五感」の時代』という出版物があるが、その内容は男女の感覚の差、年齢による感覚の差などがよく見て取れるようになってきている。例えば、「防音に気を使う女性、音を選ぶのに気を使う男性」という見出しがあり、棒グラフの一部に、ドアや窓の開閉の調整をして防音に気を使う女性55.6%、男性43.7%、洗濯機等の防音に気を使う女性32.9%、男性18.3%とあり、防音に関して女性が男性より気配りしていることが明らかに分かるのである。同様に、「触覚」を調査した棒グラフには「触覚は安全に暮らしていくために必要なもの」と考える女性が42.9%で33.4%の男性を上回る。もちろん嗅覚、味覚などを駆使しても女性は悪いものに対処する、気遣いを使していることが明らかに示されている。

3) 整理+充足

生活は毎日毎日の細かな仕事の連なりである。家族の生活を成り立たせるために様々な機器、什器が使われ、ありとあらゆる材料、食料、エネルギーを消費する。当然それらの整備、保管、保存なども家事の主要な位置を占める。雑多な家事に付随しておこなわねばならぬ整理はそれら家事の遂行を補い、家事の熟達を促進させる。

衣と食の質の安定に努め、過不足のない適量をストックし、家事を滞らせぬように整理整備する

ことは生活人に欠かせぬ資質であろう。しかし、建前ではそうでも、現代のような、生活用具・資材過多の時代に、実際の整理整備は容易なことではない。

生活調査などから判断すると、女性でも仕事としては嫌いな方の部類とある。だが、「気になる」「整理整頓しなければならぬ」と気にしているのは、間違いなく女性の方であるようだ。整理整頓が女性の仕事と言うのは不適切であるにしても、生活とその空間に心遣う気質は、女性的性情と明らかに繋がっている。だからそれでいいでは済まず、少しの努力と結びつくとき、自身と家族の快適空間を維持する働きが快いものとなるだろう。

もとより、母親に対する適正空間とは、子供に十分なものを与え得る物質の保有と、整理・整備され、精神的ストレスの生じない、行動には何ら支障をきたさない空間、であろう。生活の充足感を得るためには、整理・整備のゆきとどいた空間を保持する必要がある。

4) 心地よさ

女性的性情の最も深く関わる環境の質は「心地よさ」である。

つまり、母親は庇護すべき子供に心地よさを保ち与える使命感を、四六時中抱いている。そしてそれは自身の心地よい環境の影響によってもたすことができることを知っている。

乳児が母の胸に抱かれる安楽も、もちろん与える側の安楽が前提である。しかしそれは易しくはない。何らの障害もなく、優しく満たされた空間に包まれ、苦痛も不満も一切湧き出ないという、大げさに言うならば、浄土のような空間にいなければ、心身、底からの心地よさ、安楽は得られない。

いい母親を菩薩のような母と表現するように、家族のために全てを満たそうとする母性的性情と、空間の質を高め、安らかさを願い、母として自らの心高めんとする意志が一体となって、超越した人間像とも見える母親像が理想として描かれたのであろう。

即ち、家族空間における求心力と全員の生命力を高めるために、「心地よさ」という理想的な空間の質を掲げるのは、言い換えれば、全ての人は理想とする母性的性情の表出を望んでいることに他ならない。

さて、以上のごとく、1) 安全、2) 清潔、3) 整理、4) 心地、の空間の質を上げたが、これらはみな生活と深く結びつき、抜き差しならぬ基本的な環境質であるから、男性が軽視しているとか放置し勝ちだとか、いうことはもちろんない。しかし、日常の生活空間に、より深く関わるのは女性であり、母親の関心に勝るものはない。その限りにおいては、女性的性情が反映すると言わざるを得ない空間の質として上げたものである。

ここで少しこだわるところを記さなければならない。つまり、現代は物の溢れる時代である。いくらセーブしても、ある程度の機器は生活から外せない。さもないと、世間一般と遊離してしまう。そのような次元では、いくら母性的性情に溢れている空間でも、機器機能に満たされないときは、足らざる空間と意識されるかもしれない。

もちろん女性的性情と生活機器が対立する訳ではない。独り住まい女性の前家族空間には、むしろ、時の先端の機器やものが充満している可能性が大である。むしろ、それらはある場合には母性空間形成原理に大きく力を貸すが、しかし、ある場合にはまた大きく阻害することになる。

自動車に代表されるように、機器の多くは優れて有用なものであると同時に、恐ろしく危険な有害物ともなる。

もちろん、その選択の判断は、女(母)性の資質によって左右されることになる。

恐らく、賢明な母親はその母性的性情から、いかにもの過多の時代であれ、その中に含まれる有害、危険を慎重に避けるだろう。

女(母)性的性情は生活者としての個体にやさしさとやすらぎを与えると同時に、家族全員に集団の守護幕を被せるものであるから、女(母)性空間原理が現代に生き続けるには昔からの本脈は

変わらぬまま、時代の状況に合わせ、新たな情報を身に付けて幾らかなりと姿を変えていくものであろう。

空間を彩る女性的性情

昔と比べて現代は性差が薄らいでいく時代である。恐らく、女性の表象と男性の表象との境界は次第に曖昧になっていくのだらうと推察される。若い人たちが髪型や、服装の差を無くしていくように、空間の形象も両者接近していくのは当然のなりゆきかもしれない。

しかし、今はまだ、多くの人、現代風の混沌の空間であれ、女性的性情の表象を読み、家族空間の表象へとつないで読む。たとえ、独り住まいの空間が、もの、機器いっぱいの現代的表情の空間であるとしても、慣習的に家族空間につながるを見て、女性的性情の表象を探り取ろうとするのである。それは男女両ジェンダーのごく自然な条理であろう。見かけは変わってきても、一般的には、そうした慣習的な読みをする人は依然多いのである。それ故、女性らしいという定見の、通俗的な表象は、依然強い吸引力を持つ傾向も続く。

そこで、現代の独り住まいの女性の空間が他の目によって表現されている例を『女たちの住宅事情』（松原惇子・文芸春秋）で見ることにする。

まず、37歳の職業を持った独身女性の住まい空間は次のように表現されている。「…ベージュの絨毯にやわらかい間接照明の光があたり、まるで外国人のアパートのようだ。白い壁、ベージュの布をガバッとかけた小さめのソファが一つ。そのわきにミニチュア・シュナウザーがぬいぐるみのようにすわっている。アンディ・ウォーホールのポスターが一枚、部屋のアクセントになるように貼ってある。十畳ほどの縦長のリビングルームには、小さな二人用の丸テーブルに椅子二脚がキッチンにいく入り口の壁際におかれていた。食器棚は入って左の壁にはめこみで…中略…窓ぎわにはイタリア製と思われるシャープでモダンなフロアスタンドが、その下にコンパクトオーディオセット、そこからエリック・サティの甘い音楽が流れ

ている。特に何かがあるという部屋ではないが、サイドテーブルの上にさり気なくおいてある星形のクリスタルといいエスプレッソのコーヒーマーカーといい心にくいインテリアになっている。オーディオの上には、これまたさり気なく黒のセラミックの丸い花びんに黄色いミモザの花がいてあった。…」など、コーディネートに細かい心配りをしている様子が記されている。

更に45歳の女子公務員の場合はこうだ。「…六畳の和室には正面にリモコン付きテレビとビデオセットがあり、その上からポトスがつりさがっていた。壁側にはステレオセットがおさまっている低い棚とガラス扉のついた本棚が置いてある。押入れ側の壁にはマホガニー色の鏡台と洋服ダンスがピタッと並んでおさまっている。部屋の中央にはふとんのかかっている家具調コタツが一つ、窓にはナショナルの窓型クーラーがはめこまれている。レースのカーテンはまっ白で気持ちがいい…」などとあり、広くもない和室に通りの機器を備え、煩わしくならないようにできるだけ簡素に、吊り植物などで飾りを意図している様子をとらえている。

また33歳の美容師の場合、「…「まあ、かわいいお部屋ね」私は思わず声をだした。こんな可愛い部屋をみるのは久しいことである。ピンクのカーペット、白い小さな食器飾りだなに、ピンクのカバーのかかったソファベッド…ピンクの大洪水である。…」と、女性的好みの色彩に目を向ける。また36歳の女性会社員の場合は、「さすが十年間同じ所に住んでいるだけのことはあって、畳もつやがよく、すわっているだけで生活感が感じられる。よく和室にカーペットを敷いて洋風に部屋をつかっている女性がいるが、彼女は和室を和室として使っているのでこの部屋は完全にお茶の間という雰囲気が漂っている。…中略…居間にあるものをあげてみると、木製の食器棚、医学書や文学全集のつまった本箱、レース編みのかかった鏡台、ソニーのオーディオセット、テレビ、ロッキングチェア、編物の入ったかご、壁にはスリランカで買ったろうけつ染めの絵、写真、テレビの上には

造花のバラの花が、柱にはめだたない位置にほうきとはたきがかかっている。決して高価な家具やデザイン的に新しいものはないが、生活に必要なものはすべてそろっている。…」など、長きにわたる独りの生活が、家族空間同様の生活感を形成しているのを記している。

ブティックの経営者46歳の都心の空間の場合は、「…玄関のコーナーには動物、犀の形をしたライトがおいてあり、ピンクの光をはなっている。…中略…廊下のつきあたりにガラスの入った白い格子のドアがあり、その奥に約三十畳のリビングルームが広がっている。居間からは、マイ・ファニー・バレンタインの甘いピアノの音が流れていた。…中略…床はオール板張り。左側の壁にはつくりつけの壁と同じアンティークピンクのクロゼットが並んでいる。クロゼットの扉には鏡がはめこまれている。居間のベランダ寄りのコーナーには四畳半分の畳が敷いてあり、アンティーク家具を間仕切りとして置いてある。…中略…居間をはいって右側がカウンターをついたキッチンである。部屋の中央にはどっしりした木のテーブルがあり、残りの壁面にはアンティークの椅子が数個さり気なく置かれている。それからアンティークのデミタスカップがまるで骨董屋のショーケースを見るように並んでいる。和室との間仕切りにつかわれているネコ足のアンティーク鏡台の上には、彼女がパリに行くたびに買い集めてきた金の小さな写真立てや珍しいアクセサリーがさり気なくディスプレイされている。天井からはアールヌーボーのオレンジ色のシャンデリアが、天井の梁や壁には、アンティークの古びた絵がかざってある。…」などと表現している。実力派のこの女性の生活空間は、成人した長男との二人暮らしだが、思うがまま個性を表現して、社会人の顔もしっかりと表象している。既に家族空間を超えた空間演出で、初々しさはないが、女性らしさを強く表現しているのは明らかだ。

これらを見ると、この中の空間を表象する言葉の多くは、やはり、女性的性情を載せたものであ

ることは確かだ。しかも、中の多くは通俗的な定見に沿うものであることにも気付く。

だがしかし、一方では、このように視覚的な形象を文章に置き換えると、いささか状況を把握しにくい面が生ずるのは否めない。たとえば、これらの形象表現にジェンダーが明らかにされていない場合は、明瞭な性差を読みとることが難しいのかもしれないが、同じ情景を写真等の視覚的な図像で見せられたときには、表記はなくとも、誰もが容易にジェンダーを読み分けることができる。しかもそこに、一連の家族空間への道程さえも読み加えることができるだろう。

空間の面やものや媒体は、対置し、集合し、その相互関係の表象の意味が様々に累加され、複雑で細やかな気質が表現される。だが、それらを、複雑で難解と思う人はいない。普段の生活で、空間の視覚的形象に全く気を配らず生活している人など恐らく一人もいないだろう。

もし、たまたま接した空間が美しく整理された状態で調和のよい空間だと感じたとき、何となく女性の存在を感じてしまうことがある。或いはまた、目前の対象空間の「しつらい」或いは「飾りつけ」に、人の手が尽くされているという感じを受け、心憎い「演出」に心奪われてしまうときなど、多分「女性」の存在、或いは「女性の心」の存在が深く心に刻み込まれるに違いない。

このように「しつらい」そのものに女性の心と手を感じる確信は万人のものであろう。

俗に、インテリアデザインは女性の所業と言う通念も、故がない訳ではないのである。

空間記号としての女性的性情

さて、小論は女性空間をテーマとして、住まい空間は原初的な意味において巣づくり空間とするところから、巣づくり空間は即ち家族空間と認識し、家族空間は母(女)性空間でなければならない、すべての女性空間は巣づくり空間或いは家族空間に連なる本義的な意味があると、拙文も恥じずに書きつないできた。そして今日的情況では、その女性空間は女性の存在そのものより、女性的性情

が表象されている空間こそ意味を持つのであるから、本論の意図するところはその女性的性情を表す空間形象を組上に上げながら、その意味と価値を考えようとしてきた。勢いそれは抽象的に言いつのることになる。形象の表現には文章記述の限界があり、具体的なイメージを提示してその意味を探ることは甚だ困難なのである。

また「女性的性情」という概念自体、さほど明瞭な表現ができない面もある。イメージを具体的にするには、この概念も詰めていくよう努めなければならない。

女性的性情と言うとき、自明のことながら、それは女性と言う語とは同義にしてはならず、女性的性情を個々の女性に重ねてもいけないだろう。

確かに、女性的性情が多数の女性の資質、思考、感覚を基にして、およその傾向を表すがため括られた概念であることは間違いない。従って、それは女性という抽象体に包含されるものであることは確かだ。しかし、それは全女性の全ての性情ではない。ただ、括った概念ということは、一方では、社会的通念の「女らしさ」、つまり、通俗的な女性観の判断と重なる面があることも受け入れなければならない。その上で、結果的に近似的な面を含んでいるが通俗的な女性観の定見とは異なった観点のものと捉るべきであろう。即ち、女性というジェンダーに属していても、その人間的資質が、通俗的な「女性」像に括られるものではないように、女性の特性、性質、考え、感覚なども、決して一定の枠におさまるものではない。男性もそれは同じである。にもかかわらず、ジェンダーは確かに二分され、両性は互いに否定なくその違いを意識せざるを得ない。それはヒトという種に属し、巣づくり、つがいを形成し、また家族集団の生活を維持し、未来へ生命体を継ぐアダムとイヴの役割を与えられているからである。

従って、「女性的性情」と言えば、男性という一方のジェンダーの持つ資質、性情と補完関係にあるような逆の性情、つまり、女性という一方のジェンダーの備える、敢えて意識せざるを得ない性情というように理解したい。

だから生身の女性には全て備わっていると考えるのは間違いであり、一方の男性の内に女性的性情が多少なり共在していて自然なのである。そういう意味では、全ての人が男性的性情、女性的性情を混在させ、それ故に個々は多様な性質や感覚を持ち合わせているのである。

従って、「女性的雰囲気空間」という言い回しをしても、それ自体は実際には男性、女性どちらの空間であると言えるものではない。ただ、女性の心情のような繊細な味合いを持っていると感じ、それにつれてその雰囲気にふさわしい女性像をイメージするのである。その女性的性情の空間形象がどのような意味作用を持っているかは、もちろん観る者の資質による。そして、その心的対応こそ空間と人間の関わりを深めてきたのである。

強いて言えば、実際の女性空間が女性的性情を示す何らの形象を持たない空間である場合でも空間の実質的役割や機能は十分果たし得る空間である可能性はある。しかし、その空間は人々に生活空間の魅力を何も伝えることはできず、よい影響を与えることはない。

ともあれ女性空間から巣としての住まい空間、家族空間と言うように、連鎖的に人間の営み、生活空間を思いたどることができるのは女性的性情が表象された空間、つまり、女性的性情の記号の乗った空間でしかあり得ない。

具体的にはたとえば「カーテンは重々しいドレープ地などではなく、軽い木綿地の小さなプリンと柄が少し開いた窓で揺れ、すっきりして小振りの、明るい色の家具で整えられた空間」であるとき、そこには女性的性情の記号がいろいろな形象に乗り、それらが相乗的効果をもって女性的空間を表象してくる。鏡台などはもちろん手鏡や花柄のスタンド、パッチワークのクッションといったものが女性の記号を付しているのは当然だが、もっと微細なそれらのディテールやコンビネーションに女性的性情が多様に読みとられるからである。

重たい厚手のカーテン、猫足等の重厚な家具調度、扱い辛そうなメカニズムの機器、棚を埋めるハードな事典類を眼にすると、当然のようにその

空間に男性的性情なるものを感じ取る。それらの状況は必ずしも女性記号、男性記号を載せたものではないにしても、前者には素直な生活の味わいが、何の誇張もなく表れる様子なのに、後者はやや意地張った思わせ振りの雰囲気がある、と言うような表象感覚を、普通の生活感覚が自然に読み分けるのである。

多くの人々の深層には、女性の方が住まい空間を実質的に維持する立場にあるという思い、時間的にも主婦の立場で家族の生活空間に多く関わり、日常生活の本当の主体者なのだという思いが潜在しているのを否定できない。そして、だからこそ、そこには多少のゆとりと遊び心と美意識がなければ、女性的性情も味気ないものになると感じている。そしてデザインの役割に目が向けられた。

結びとして

1980年代に入った頃から、住宅は核家族を対象としたものが急激に多くなる。それに続いて、二世帯住宅が少しずつテーマに取り上げられるようになった。外の仕事に就く主婦が多くなってきたからである。女性の社会進出がいよいよ顕著になり、「一人立ちできれば結婚しなくてもよい」女性、「子供ができて仕事も続ける」女性が20%を超えたと(1980年1月総理府調査)話題になった。実はこの頃、女子大生を対象にした「会館」や「ハイツ」といった建物が、ユニットバス・トイレ、洋服ダンス、冷蔵庫、エアコンなどを付けて派手な現れ方をした。少子化の傾向と生活が豊かになっていく流れの中で、娘にお金を使う親たちのことが話題になった。こののち、若い女性たちの独り住まいの空間が目に見えて増加するのだが、「会館」や「ハイツ」はそのことの契機となった。一方で、「二人の部屋」「インテリアライフ」などの雑誌が刊行され、空間コーディネイトへの関心も高まっていく。こうした社会的変革の流れは女性の生活空間を様々にクローズアップさせることになった。メディアとしての空間が豊かに花開く時代になったのである。

小論はそれ以前の社会を背景にした憧憬と追懐

の気分に満ちた女性空間の描写文を、多々引き合いに出しながら、「女性的性情」に濃く染まる空間の形象を浮上させ、現代の社会状況と対照させるのが当初の目的であった。しかし、それは一方で女性を偏った像、つまり定見通りの女性像を強調する、偏向した論に陥る危惧を感じ、また多くの文学が描写する空間は具体的なイメージが程々に薄らいでいて、現代の、映像溢れる時代には、所詮抽象的な空間表象としかかなりえないことを自覚した。結果は古代より確かに受け継がれてきた女性の、或いは母性の、本質的な意味を負う女性空間に思いを寄せた。

現代は女性資質の一部が揺れ動き、イメージは更に移り変わる気配である。しかし、もとよりそれは女性というジェンダーに属する個々が、それぞれ幅の広い資質で成り立つのであるから、イメージが移り変わるのも自然に受け止めなければならぬ。それに、先述したように、時代の進展は空間表象にも両ジェンダーの差異を少くなくしつつある。しかしながら、一般的な特質の範疇にある女性的性情、それは、定見に近いものであろうがなかろうが、空間に匂うその性情の理屈抜きの味合いが、それこそ故郷の母の座に似て、懐かしさ甘さを薫り立たせると推察される。

幾度も確認することになるが、女性の空間は、家庭の味わい、魅惑、その求心力を独身の住まい空間にして既に一部覗かせている。そしてそれは、部屋が片づき、手芸などのものが置かれ、化粧水の匂いを吸ったカーテンがそよいでいるだけの、珍しくも、難しくもない空間が表象しているであろう、女性の存在というそのことだけに、家庭というものの本質が重なってしまう。これは、他の多様な女性的空間の些細な形象に広く該当するであろう事実である。

さて最後に、蛇足ながら追記しておかなければならない。即ち、女性の空間の一面には、生きる存在の証としての、エロスの感覚が溢れ出ているのを避けることはできない。男性の多くは女性というジェンダーのエロスのものをこそ嗅ぎ取ろうと、視覚的表象の読みを歪ませることが多々あ

るようだ。もちろん、そのようにエロスに惹かれ過ぎる視野狭窄の記号読みは、響きすべき女性像を生むことが多い。それらの男性が探求するいわゆるエロスの視覚表象は、多くは夜の巷の商空間に溢れている。それらは人を守り育てる安らぎの空間からは最も遠いところにある。

インテリア・デザインないしはインテリア・コーディネートは、時として日常と非日常の仕口を間違ふときもある。非日常空間にはエロスの形象が表象されることがあり得ても、日常の生活空間においては普段の女（母）性的性情溢れる表象こそが美しく自然な姿形である。

その安泰と郷愁を危うくしてはならない。

参 考 文 献

- 玉越芳夫『古代日本の住まい・建築的場所の研究』
ナカニシヤ出版 1980
- 阪倉篤義・浅見徹『一語の辞典／家』
三省堂 1996
- 泉 靖一『住まいの原型1』 鹿島出版会 1971
- 吉坂隆正『住まいの原型2』 鹿島出版会 1973
- 「スマトラ・母系社会の慣習と家屋」
倉田 勇 (99-109)
- 「台湾・アミ族の住居と方位観」
常見純一 (157-175)
- アドリアンフォーティ著高島平吾訳『欲望のオブジェ／デザインと社会1750-1980』
鹿島出版会 1992
- 博報堂生活総合研究所編『五感の時代』
プレジデント社 1994
- 家庭総合研究社編著『昭和家庭史年表1926-1989』
河出書房新社 1990
- 加藤寛監修『ライフデザイン白書1996-97』
ライフデザイン研究所 1996
- (財)福岡市女性協会編『現代女性図鑑データブック
1995年度版』 1996
- ヴィレーヌ・ガヴァリニ編著『フェミニズムから見た母性』 勁草書房 1995
- ドミニク・ドアン・他・著 萩原葉訳『フランス女性の24時間』 草思社 1988

- 松原淳子『東京23区・女たちの住宅事情』
文芸春秋 1987
- 八木あき子『ドイツ婦人の家庭学』新潮社 1983